

書 評

北斗出版発行

上岡直見 著 定価 2,781円

乗客の書いた交通論—永続的な交通を求めて

評者 中 村 泰 人*

Yasuto Nakamura

交通論は言うまでもなく、地球のエネルギー・資源と密接に関係しているが、ここではそれは主テーマではない。著者は、交通の工学的視点である交通と環境・エネルギー問題、また、交通と社会との係わりについて、既に二冊の本を著しているのだから、本書では「移動の自由という原点に戻って考えなおしてみるのが趣旨」だとしている。なお、ここで扱っている交通は、上空や海上のそれだけでなく、地上の交通である。

著者の主張は、「健康で文化的な生活を享受するためには、車を減らして公共交通を活用することが不可欠の条件である」というのを基本的立場としている。それを言うために、初めの章で、総量としての無駄をできるだけ省くという主旨から、エントロピーの法則を枕に話を進め、「誰でも行きたいところに行ける」「誰でも運びたいものを運べる」という交通の自由を保障するものとして、「交通権」という概念を提案している。これが本書の目玉といつてよいであろう。そして、その延長として「なぜ電車が混むか」を論じ、日本の交通機関は公共交通でなく、民営化したJRを含めて、私企業で独立採算性の都市鉄道、すなわち民鉄であるため、経営効率をあげるための「詰め込み輸送」をする、結果として混雑する、としている。

自動車については、私たちは「車が欲しいのか、それとも永続的（サステイナブル）な移動の自由が欲しいのか」をよく見きわめねばならない、としている。確かに、アンケート調査によって、私的な車の購入欲は強いし、買ったなら最後、主にレジャー目的に使われることが明らかになっているが、このように運転者の移動の自由は満たされるとしても、その反面、排気ガスによる環境への負荷はもとより、事故によって他人あるいは自分を殺傷し、歩道駐車によって歩行者の通行を妨げたり、心理的圧迫を加えるなど、他の移動の

自由に対して侵害をしている。車の社会的費用も相当なものである。

そして、「運ぶ」ということを考えれば、トラックでも万能ではなく、鉄道輸送が特に大型定型貨物にとって適しており、通勤でも全員が座れるような、現状の4～5倍の鉄道の輸送力の増強は、やりようによっては可能であったことを、試算によって示している。結論として著者の主張を手短かに要約すれば、公共交通機関として鉄道を見直し活用することが推奨される、ということになるだろう。

巷間に、交通システムに関する類書が少ないので、車の保有台数が際限もなく増加する現状に対して、本書は新しい社会秩序へ向けての警鐘になり得るであろう。その意味で高く評価されなければならない。

ところで評者は、走行する自動車も都市の高温化に加担しているとみて、自動車交通量調査を行ったことがあるが、それによると、都市交通では、営業車も含めてではあるが、バス・トラックを除いて自家用車の走行台数は全走行自動車台数の半数以上を占めおり、相当な割合であることを知らされる。この数字、その意味するところを考えると、著者の言うような総量規制は実際問題として大変難しいことが懸念される。

思えば、著者の交通論は「運ぶ」ことに力点を置きすぎたようである。人間を主体に「生活（生きるための行動）」を考えれば、「運ぶ」ことよりも「動く」ことが先決であろう。「動く」ことにもう少し切り込みがあれば、さらに充実した交通論になったと思われる。

ともあれ、著者は、幼少時から熱心な鉄道マニアであったことがほうふつとされ、長ずるにおよんで、地上の移動手段である交通の問題に並々ならぬ情熱と蘊蓄を傾け、交通問題を専門の業とする者でないといながらも、それに対して十分な見識を備えていることがうかがえる。そして、何よりうれしいことは、エネルギー・資源学会の資料を10ヶ所も引用してくれていることである。

* 京都大学大学院環境地球工学専攻教授
〒606-01 京都市左京区吉田本町